

2014 移住希望地ランキング

1位	山梨県
2位	長野県
3位	岡山県
4位	福島県
5位	新潟県
6位	熊本県
7位	静岡県
8位	島根県
9位	富山県
10位	香川県

ふるさと帰郷支援センター調べ。交通アクセス、相談体制、求人などの情報提供、移住先を上手にPRしている地域のポイントが高い傾向に。

「住みたい田舎」ベストランキング



(株)宝島社が発刊している全国誌「田舎暮らしの本」。11月号では本市の温泉が表紙を飾りました。ランキングでは豊かな自然、安全・安心な水と食、温泉、就農支援、空き家情報提供などが高い評価を得ています。

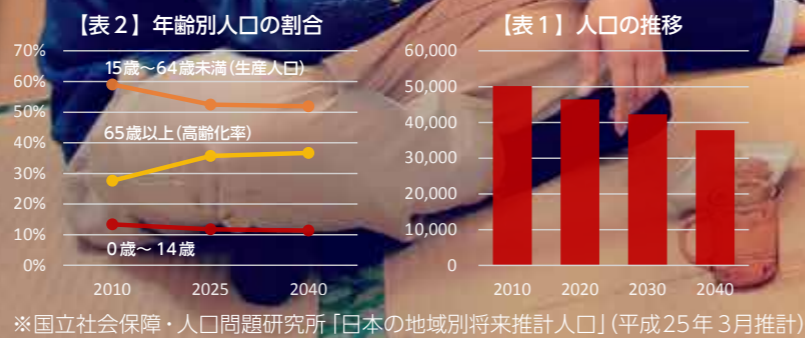
●全国ランキング 16位 ●福岡から通える田舎 1位

※295市町村中

こうした背景も踏まえ、市はことし4月、移住・定住支援策を強化するために集落・定住支援室を新設。移住者でもある地域おこし協力隊の「新戦力」を加え、新たな移住・定住支援、地域活性化への取り組みをスタートしました。

一方で大きな問題も抱えています。本市の人口は年々減り続けており、2040年には3万8千人まで減ると推計されています(表1)。生産人口と呼ばれる15〜64歳が全体に占める割合は、10年の59%から51.9%に下がり(表2)、結果的に出生率も低下していく予想です。持続可能なまちづくりのために、生産人口の流出を防ぎ、交流人口と定住者を増やす政策が急務です。

「住みたい田舎」上位にランクイン NPO法人ふるさと帰郷支援センターが2月に発表した移住希望地ランキングで、全国47都道府県中、熊本県は6位にランクインしました。民間の出版社が実施した「日本の住みたい田舎ベストランキング」では、本市が初登場で全国16位、福岡県から通える田舎で1位に選出。移住・交流先として注目度の高いまちに選ばれています。



移住定住コンシェルジュ
村上貞志さん

地域健康プランナー
北里嘉幸さん

集落文化創造プランナー
若下卓利さん

癒しの里コーディネーター
瀨明子さん

移住定住コンシェルジュ
鈴木良和さん

住んでよし、訪れてよし。 きくち暮らし



▲龍門にある北里嘉幸さん宅に集まった5人の地域おこし協力隊の皆さん。地域のまつりに出品したおでんをつまみながら、まちの魅力を語りました。元は空き家で、現在は住居兼交流スペースとして活用中。

今、都会から田舎への移住を希望する人が増えています。これを好機ととらえ、人口減少、高齢化が進む地域ではさまざまな支援策で都会の人々を呼び込んでいます。都市と農村のつながりが地域にどんな効果をもたらすのでしょうか。今回は移住・定住支援と地域づくりについて考えてみます。

企画振興課集落・定住支援室
☎0968(25)7250

田園回帰がブームに

「リタイヤしたら田舎で過ごしたい」「第二の人生を自然の中で」。こうした声は以前から高齢世代を中心にありました。リーマンショックや東日本大震災を契機に、今では子育て世代で地方への移住を検討する人が増えています。

そんな中、若者が農村に移住する「田園回帰」がブームになっています。政府が平成26年に実施した世論調査によると、都市住民の31.6%が農村などへの定住願望を「ある」「どちらかというところ」と回答し、平成17年の調査に比べ11ポイント上昇。特に20〜29歳の男性では47.3%に達しています。こうした動きを農村への定住に結びつける取り組みが、全国の自治体に広がっています。

「情報発信が足りていないのかも。もっとまちの価値を共有して、みんなで磨いていかんとね。……っていうか、このおでんたいぎやうみゃー!」

「菊池のポテンシャルって本当によい。住みたい田舎ランキングでも上位に選ばれてるし。でも、その価値を知らない住民が多いような……」

「パワースポットを巡るツアーに参加した東京の友人が、めちゃくちゃ楽しかったって話してたよ。普段こんな場所に住んでいる人がうらやましいって」

「そりゃ菊池産の野菜使ってるからね。このカブなんて甘くて最高。……アツッ!」

「そうそう。地元の人ってこのオでんに気付いてるのかな。お、このおでんめっちゃおいしー!」

「今日のまつり楽しかったよね。大自然に囲まれて好きなものを食べて、みんなで時間を共有して。都会に住んでいた僕たちにとっては異次元空間だった」

田園回帰がブームに



1職人から作業の仕方を学ぶ参加者 2特殊な工具は使わずホームセンターでそろった道具を使用 3ふすまの張り替え作業 4自宅の改修に役立てたいと定住者も参加し、市外参加者と情報交換を行っていた 5菊池たてもの応援団の松田さん

▼開設の様子を動画でご覧になれます。AR 動画の視聴方法は43ページをご覧ください。



1開設式で一堂に会した地域おこし協力隊の皆さん 2支援センターに生まれ変わった旧龍門小。市民の交流施設としても活用中 3空き家バンクの登録事務や移住相談窓口など協力隊の活動拠点となっている

地域の宝を見つけて生かす

移住・定住支援策の強化に向けて6月、旧龍門小に集落・定住支援センター「きくち暮らし」を開設しました。そこに配属された2人の地域おこし協力隊の「よそ者・若者視点」を生かした取り組みを紹介します。

「自然が豊かで暮らしやすい菊池をアピールし、移住希望者にしっかりと情報を提供していきたい」。こう話すのは、本年度から地域おこし協力隊になった村上貴志さんと鈴木良和さん。6月から支援センターに「移住・定住コンシェルジュ」として常駐し、移住希望者に空き地や空き家の情報を提供しています。

「移住者と住民両方に喜んでもらえるように」と、地域活動にも積極的に参加。移住希望者と地域住民とのパイプ役も担い、スムーズな移住・定住を目指しています。

「負資産」を「富資産」に

二人の現在の主な業務は「空き家バンク」。市が平成21年にスター

トした制度で、再利用可能な空き家・空き地の情報をホームページに掲載し、全国の購入・賃貸希望者へ発信しています。制度開始から6年目を迎えましたが、所有者からの情報提供が少なく、登録数は伸び悩んでいます（11月1日現在登録数11戸・県内5位）。この問題を解決するべく、協力隊の二人が市内を奔走し、有効活用に向けた取り組みを進めています。

空き家バンクの活用には地域の協力が不可欠と口をそろえられます。「菊池への移住希望者はたくさんいます。でも提供できる空き家数が足りません。放置していたらやっかいものの「負資産」ですが、活用できれば地域の大切な「富資産」に変わります。5月には空き家対策特別措置法が全面施行さ

れ、自治体による強制撤去も可能になりました。でも、そうなる前に解決していきたい。空き家の対処に悩んでいる人も、まずは一度ご相談ください」

地域の人材を活用 空き家改修ワークショップ

「この角はそろえてね。そこに釘を打ったらいかんですよ」。先日まで空き家だった母屋の一室に、大工の声が響きます。

市内の職人から家の改修方法を学ぼうと10月17日、第1回空き家改修ワークショップを龍門地区の民家で開催し、市内外から12人が参加しました。指導にあたってのは職人集団「菊池たてもの応援団」（松田公伸団長）のメンバー。建

造物や文化財などの改修や、伝統技術の継承活動などを行うまちおこしグループです。「プロの技術を移住支援策に活用できないかと考えました」と鈴木さん。移住希望者や定住者に技術を提供するだけでなく、協力隊自らも技術を身につけ入居のサポートをしたいと考えています。「移住希望者は『自分でできることは自分で』と自立心が高い人が多く、こうしたワークショップは需要があると思いました。空き家物件や取り組みのアピールにもつながります。この家主も移住者ですが、床もふすまもきれいな喜びでもらえました」と手応えを感じています。

たてもの応援団の松田団長は、ワークショップへの思いを次のように語ります。「参加者が現場で実践できるように、プロが使うような特殊な工具は使わず、身近にある道具と材料を使いました。要領を覚えれば誰でもある程度の改修はできるようになります。地域活性化のサポートができるのはうれしい限り。これからも支援していきたいです」

相談件数が6倍以上に

「まずはまちの魅力を発信していくことから始めました」と、集落・定住支援室の歌岡憲一室長は振り返ります。全国の移住定住情

報が集まるポータルサイトに市の情報を掲載し、協力隊と共に都市圏で開催される移住フェアに積極的に参加。来場者にまちの魅力を紹介しながら相談にも対応していきます。「スムーズな定住につながるよう、地域の主な行事や区費などの仕組みも説明し、本市の真の姿を披露した上で検討してもらいます。単に移住者を増やすのではなく、移住後を見据えて地域活性化につながることを大事です」

ワークショップ参加者の声



移住希望者 矢ヶ崎洋さん (熊本市)

「舎暮らしに関心があり、将来、古民家に住むときのことを考えて参加しました。こうしたイベントはありがたいですね。菊池市は移住者の受け入れに積極的なイメージがあります。相談できる仲間づくりになるし、地区の行事や慣習など、地域の情報も得られるので助かります。」



定住者 中原洋さん (茂藤里)

11年前、自然に囲まれた環境で子育てしたいと思い菊池に移住しました。現在住んでいる家の補修を自分でやりたいと思い参加しました。ネットや本で見ると、実際の現場で見るとでは全然違いますね。その場の状況で対応するプロの技術を学ぶことができました。」



東京都で開かれた移住相談会で、来場者の相談を受ける歌岡室長と支援室の職員。「相談者と正面で向き合い信頼関係を築くことが何よりも大事」と歌岡室長



Interview ① **山田健介さん・愛枝さん・胡桃ちゃん**
(雪野、移住元：東京都)

—移住のきっかけを教えてください。
東日本大震災をきっかけに地方への移住を検討しました。決め手になったのは子育ての環境です。東京では片道1時間半かけて、満員電車で揺られながら通勤する日々でした。それが、妊娠をきっかけにとてもつらいと思うようになったんです。あふれる情報、過激な広告、高齢者や子ども連れに冷たい目

「子どもに見せたい風景が見つかりました」

—暮らし始めてどうですか。
水と空気がすごくおいしいです。住んで2年経ちますが、それが当たり前にあることを今でも素晴らしいと思っています。地域の皆さんにはとてもよくしてもらっています。先日は玄関先に野菜がどっさり置いてありました。娘が病気になったときは「具合はどきちゃんね」「元気になったるか」と声をかけてくれます。ありがたいですね。高齢者が生き生きとしていて、地域で子どもを守ってくれる。美しい自然と、支え合って生きる人たちの姿。子どもに見せたい風景が見つかりました。

自然に寄り添うライフスタイル

本市に移住してきた人たちに、実際に住んでみて感じていることを聞きました。

—暮らし始めてどうですか。
移住して5年経ち、ようやく生活に慣れてきたところです。地域の交流が盛んで人のつながりが強いと感じています。年に数回、地区の皆さんが集まるのですが、全員がまるで家族みたいに仲良く話しているのを見て素晴らしいなと思いました。都会にはない光景です。今は有機農業をしていて、季節の旬の野菜を栽培しています。以前は大阪でアパレルの仕事をしていました。農業の知識はなく、有機農業という言葉も

—移住のきっかけを教えてください。
平成21年、自転車旅行で鹿児島県の屋久島まで行く途中、玉名市で農業研修を受けていた友人に会いに行きました。そこで農業と自然の素晴らしさを知り、翌年、玉名市に移住しました。その後、子どもが生まれて家が手狭になったので、空き家を探していたんです。そんなとき、知り合いに紹介してもらった菊池の空き家を一目で気に入って、引っ越すことにしました。

「お腹だけでなく心も満たされています」

研修先で初めて知ったんです。今は自給自足できるようになり、野菜を買うことはなくなりましたね。自分で作った野菜を食べるようになったら、今まで買って食べていた野菜は「本物の野菜ではない」と感じるようになりました。大阪にいたころの食事は、単純に腹を膨らませるだけの手段でしかなかったんです。今は以前よりも食べる量は減りましたが、お腹だけでなく、心も満たされています。

Interview ② **水口啓太郎さん** (稗方、移住元：大阪府)



1 改修した納屋を案内する横手さん(富の原台) 2 音楽会には地元の人も出演するなど生きがいくりにもつながっている 3 果拾い体験会など里山を活用しながら環境保全の大切さも訴えている

「芝居小屋を開くのが夢だったんです」と笑顔を見せる横手眞知子さん。約10年前、夫の実家がある大平地区の空き家を譲り受け、納屋を多目的スペースに改修しました。最初は仲間内だけで活用していましたが、退職を機に開放を決意。定期的に演劇や音楽会などを開催し、来場者同士の交流を楽しんでいます。「芝居を見た地域の人が『久しぶりに声を出して笑った』『おしゃべりできる場所ができた』と喜んでくれました。すごくうれしかったです」。音楽会には地元の人も出演するなど、地域の活性化に役買っています。民泊も検討中。「県外からのお客さままで『ここに住みたい』と話す人もいました。里山を良さを知り、守りたいという思いを育んでもらえたら」と横手さん。納屋だった場所にたくさん笑顔が生まれ、里山の魅力を発信しています。

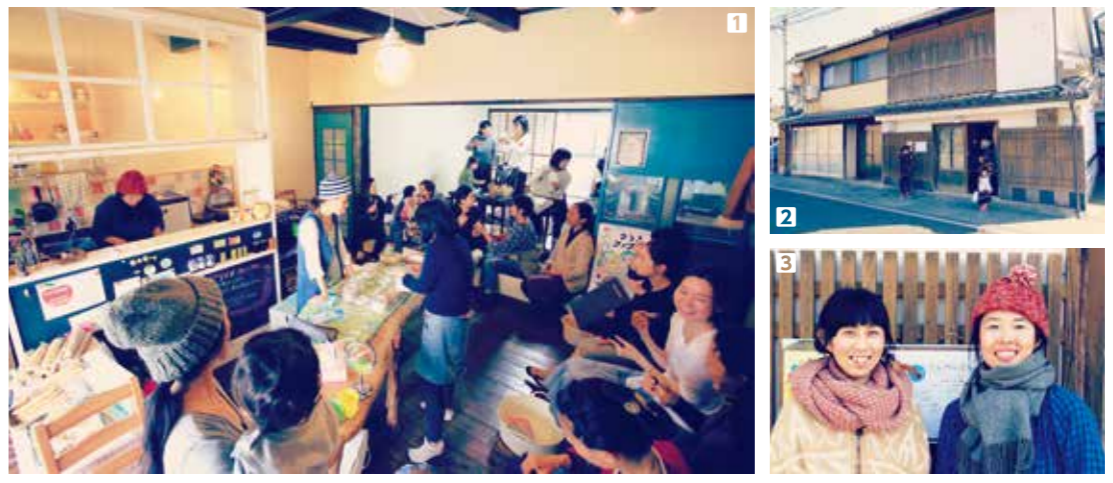
空き家を地域の縁側に

空き家を活用し、地域の活性化に取り組んでいる人たちの活動を紹介합니다。

—暮らし始めてどうですか。
限府の御所通りに今春オープンした交流施設が、にぎわいを見せています。「夫が仕事場として借りている空き家を、地域の交流の場に活用しようと考えました」と運営者の塚崎聡子さん。手芸ワークショップやマルシェ、お話し会、展覧会、会議室などさまざまな用途に活用しています。部屋には地域住民が作った農産物のほか、パンやお菓子などの販売スペースもあり、買い物を楽しむ人の姿も。女性向けのイベントには、子ども連れの母親も多く参加しています。「訪問者同士で子育ての悩みを相談したり、勉強会を開いたり。お母さんたちの憩いの場にもなっています」と生田沙織さんは目を細めます。SNSなどで口コミが広がり「最近では県外から訪れる人も増えました」と生田さん。一軒の空き家活用が、交流の輪を広げています。

地域の交流空間に
「こんぱいとう」

1 大勢の参加者でにぎわうワークショップ。福岡県や宮崎県から訪れた人の姿も 2 風情ある外観。屋号の「こんぱいとう」には「いろんな人が集まる場所に」との思いが込められている 3 運営者の塚崎さん(上木庭)と生田さん(上木庭)◎



横手庵なーや

里山の素晴らしさを伝えたい



移住体験ツアー
第1回「菊池三昧」開催

今後につながるツアーになりました」と振り返ります。

温度差と抵抗感

「こんな大きいネギ見たことない」道の駅旭志近くの農地で、収穫体験に汗を流す移住希望者の皆さん。土の付いたネギを手に驚きの声を上げました。

地方への移住を検討している人たちにまちの魅力を感じてもらうため、市は11月21日～23日の3日間、初の移住体験ツアー「菊池三昧」を開催しました。ツアーには県外から4組7人が参加。斑蛇口湖でのレガッタ体験や農家体験、移住者との座談会、菊池渓谷散策などを楽しみました。

神奈川県から参加した夫婦は「以前から菊池市に関心があり参加しました。菊池神社で聞いた菊池一族の歴史はとても興味深かったです。自然以外にも魅力的なのが多々あることが分かりました」と笑顔を見せます。

市職員と一緒にツアーを企画した協力隊の村上さんと鈴木さんは「初の企画で不安でしたが、大きなトラブルもなく、最後は全員が笑顔で帰ってもらえたのでホッとしました。要望や改善点も分かり、

今回のツアーは地元農家、ボランティアガイド、NPOなどの協力を得て実施しました。郷土料理づくり体験に協力したのはNPO法人きらり水源村。グリーンツーリズム推進による地域活性化を図りながら、就農支援、空き家調査などを行っています。

「移住者を受け入れる意識には地域で温度差がある」と事務局の松崎勝己さんは打ち明けます。「自分たちがつくり上げてきた地域を壊されたくない」と外部からの受け入れに消極的な地域もあります。空き家にしても、先祖代々受け継いできた家を他人に貸したり売ったりすることに抵抗がある人は少なくありません。移住者にも定住した人がいる反面、いつまでもたってもよそ者扱いされることに嫌気が差し、都会に帰った人もいます。移住希望者呼び込むだけでなく、受け入れるための土壌づくりも同時に進めていく必要があります」

地域で受け入れるということ

移住希望者にまちの魅力を直に伝えることを目的に、移住体験ツアーが開催されました。参加者から好評を得る一方、受け入れる側となる地域の課題も見えてきました。移住者と地域。両者のギャップを埋めるために大切なことはなんのでしょうか。



AR



受け入れる意識と心構え

農家体験で農地を提供したJA菊池旭志支部葱部会の松永伸二さんは、協力した理由を次のように語ります。「都会の人と交流できる良い機会だと思いました。収穫体験は予想以上の収穫量にびっくり。熱心に質問する人もいて、農業への関心が高いことも分かりました。会員の高齢化も進んでいるので、担い手の確保にもつながると思います。これからは私たちが「地域で移住者を受け入れていく」という意識と心構えを持つことが大事だと思います」



14 ボランティアガイドの案内で菊池渓谷を散策 2 農家体験では生産者と野菜作りの話に花が咲いた 3 初めての薪割り体験 5 移住者との座談会では「体験者の生の声が聞けてよかった」との感想もあった 67 地元住民と交流しながら郷土料理に挑戦 8 竜門ダムではレガッタを満喫 9 きらり水源村の松崎さん

移住希望者・地域住民の大きな声では言いづらい？本音を聞きました

移住希望者の本音

- ① 仕事がない
 - ・もっと就労支援に関する情報がほしい。
- ② 交通アクセスが不便
 - ・ずっと車が要らない生活を送っていたので電車やバスが少ないのは不便。
 - ・高齢で運転できなくなったときが不安。
 - ・巡回バスは通っていない地域もあるので、活用できる範囲が限られてしまう。
- ③ 地域内のコミュニケーションに不安
 - ・区役など地域行事の必要性は理解できるし参加したいが、よそ者扱いされないか不安。
 - ・住民同士の交流は大切だけど、ある程度のプライバシーは守りたい。
 - ・方言が分からない。

住民の本音

- ① 田舎のルールを守ってほしい
 - ・昔ながらのしきたりなどルールをしっかり守ってくれるか不安。
- ② 地区行事へ参加してほしい
 - ・集会や区役などに顔を出してくれるか心配。
 - ・区費や不足金をちゃんと払ってくれるか。
- ③ お客さま気分でないでほしい
 - ・田舎に「来てやったぞ」と思うような人には住んでほしくない。

住民が地域を磨き、

人の流れをつくる

Special Interview



九州のムラ 代表
養父信夫さん

Profile ようふ・のぶお

昭和37年6月22日生まれ。九州大学法学部法律学科卒。雑誌「九州のムラ」編集長、グリーンツーリズム大賞2007特別賞受賞。九州のムラたび応援団団長(九州グリーン・ツーリズム研究会会長)、総務省地域創造力アドバイザー、九州6次産業化推進会議専門委員ほか。本年度から本市のグリーンツーリズム推進アドバイザーに就任。福岡県宗像市出身。53歳。

都市と農村の交流は、地域活性化策の柱として期待されています。移住人口と交流人口を増やし、地域の活性化を目指す本市にとって、今後どんな取り組みが必要なのでしょう。

本年度から本市のグリーンツーリズム推進アドバイザーに就任した養父信夫さんに話を聞きました。

地域の価値に気づき生かす

九州をずっと巡ってきた自分から見ると、菊池の最大の魅力は市民の民度の高さ、それと水を中心とした環境だと感じています。九州を主導していた菊池一族の誇りと歴史が刻まれた土地、そこで暮らすことで積み重ねてきた民度。水の都・熊本を支える源流、水源。地。先人たちが築いた水路、いたるところに祭られている水神様、

龍門や戸豊水、清水といった水にまつわる地名の数々……。この地は水の神様に守られてきたのでしょうか。

このような地域の価値に住民が気づき、地域づくりに生かしていくことが大事です。

行政主導型から住民主導型へ

地域づくりは、従来の行政主導型ではなく、住民自身がやりたいと思う住民主導型の地域づくりを始めてほしいと思っています。

農家民泊、農家レストラン、体験交流、地場産品の開発、直販、ネット通販、廃校活用イベント、フットパスなど、先進地の話を聞き、実際に見て「やりたい！」と感じたことを、まずは自分でやってみてください。そんな人が一人、二人、三人とつながっていけば、

地域づくりは加速していきます。

住民が地域の物語を語る

観光の面では、従来のイベント型観光ではなく、これからは菊池ならではの地域資源を生かした「地域づくり型観光」が求められてきます。まずは、地元学*の視点で、地域の資源、物語、歴史を地元の皆さんが知り、磨き上げていく必要があります。

住民が地域の物語を語り、ガイドし、体験受け入れなどをやっていく。こうしたツアーをイベント的に終わらせることなく、常時受け入れる体制整備も必要です。それで都市からの継続的な人の流れが生まれます。

人が多く訪れる地域は経済も活性化し、移住先としても魅力ある地域になっていくはず。



1 鳳来・穴川区の集会所で地域づくりについて話す養父さん 2 3 民泊の先進地研修。11月は横手さんら市民を連れて大分と阿蘇の事例を学んだ

*地元学：地元の人が主体となり、地域外の人々の意見や視点を加えながら地元を調べ、その地域独自の生活文化や伝統、歴史を見直すこと。

「よく来たね」「お帰りなさい」の声が聞きたくなるまち

温かくてかっこいい

先日、地域のイベントに参加していた関東出身の若者に、菊池市の印象を尋ねてみました。すると「人が温かくて、なんだかかっこいい」という答えが返ってきました。小さなコミュニティで互いに支え合い生活を送る姿に、都会にはない温もりを感じるそうです。自然と共に生きる生活の知恵や技が、かっこよく映るのでしょう。共同体の中で暮らす幸せや、自然に寄り添って生きる豊かさや、都会の人にとって大きな魅力になっています。

田園回帰のブームに乗り、菊池の人氣が高まっている今は人を呼び込むチャンスです。しかし、移住・定住促進の政策はすぐに成果が現れるものではありません。

就労支援や子育て支援などの行政策、地域資源を生かした観光振興やグリーンツーリズムの推進など、さまざまな分野で連携した取り組みが必要です。そのために

は行政、団体、企業、住民が力を合わせ、長い目で辛抱強く取り組んでいかなければなりません。それに、ただ人口を増やせばいいということではありません。「こぎゃん田舎におったっちゃなんにもならん」と言う人が多いところに人は訪れません。地域に誇りを持ち「住み続けたい」と思う人が増えることで、地域に活気が生まれ、人を引き寄せる魅力あるまちへと変わっていきます。

住んでよし、訪れてよしのまちへ

訪れる人々をまち全体でもてなすこと。そして、子どもたちが将来、地元で暮らしたいと思うようなまちにすること。そうすることで菊池を愛する人々が集まり、交流が生まれ、活気のある地域が増えていくのではないのでしょうか。

誰もが「よく来たね」「お帰りなさい」の声を聞きたくなるような、住んでよし、訪れてよしのまちとなるように。

移住・定住化に向けた支援制度 を実施しています

平成27年12月1日現在

情報発信

●空き家・空き地情報活用制度

- ①空き家所有者・移住希望者
- ②空き家・空き地を売りたい・貸したい人の空き家情報をホームページで発信
- ③集落・定住支援室 ☎ 0968(25)7250

住宅支援

●定住促進空き家改修等補助金

- ①空き家・空き地情報活用制度に情報利用登録をしている人
- ②購入、賃借した空き家の改修に要した経費に対し補助補助率3分の2 限度額100万円
- ③集落・定住支援室 ☎ 0968(25)7250

●定住促進空き家活用奨励金

- ①空き家・空き地情報活用制度に物件登録をしている空き家所有者
- ②賃貸借契約などが成立したとき10万円を交付
- ③集落・定住支援室 ☎ 0968(25)7250

●住宅改造助成事業

- ①介護保険法の要介護認定を受けた人がいる世帯
- ②住宅改造に必要な経費を助成（限度額あり）
- ③高齢支援課 ☎ 0968(25)7216
福祉課 ☎ 0968(25)7213

●住宅及び店舗のリフォーム又は新築工事補助

- ①市に居住または見込みの人
- ②市内の施工業者に依頼して行う住宅・店舗の改築・新築者に市内共通商品券を交付（限度額あり）。着工前に市へ申請し事業決定を受けること。詳しい内容は商工観光課と事前協議を行うこと。
- ③商工観光課 ☎ 0968(25)7223

●生ごみ処理機購入補助金

- ①市民全般
- ②一世帯当たり、電動式生ごみ処理機は2万円、生ごみ処理機は3千円を限度として補助。
- ③環境課 ☎ 0968(25)7217

「菊池市定住化促進に向けたガイドライン（住宅対策編）」を策定し、恵まれた自然環境や温泉をはじめとする観光資源を活用しながら定住化促進の取り組みを進めています。定住促進に向けた支援などの状況を掲載していますので、ぜひご活用ください。

問い合わせ先 集落・定住支援室 ☎ 0968(25)7250

番号の説明 ①対象者 ②事業内容 ③問い合わせ先

●定住促進空き家ごみ処理支援事業

- ①空き家所有者または空き家・空き地情報活用制度に情報利用登録をしている人
- ②市の施設へ持ち込む際のごみ処理手数料を免除
- ③集落・定住支援室 ☎ 0968(25)7250

●浄化槽市町村整備推進事業

- ①下水道処理区域外の住宅所有者
- ②対象地域における浄化槽の設置・維持管理を市が実施（設置負担金と使用料が発生）
- ③下水道課 ☎ 0968(25)7244

●小規模水道施設整備補助

- ①共有水道施設所有者
- ②地区有および5戸以上の共有に限る水道施設の新設、増設、改修の工事を行う人に対し補助
- ③水道局 ☎ 0968(23)6066

●雨水タンク設置補助金

- ①市内在住・自己の住宅に雨水タンクを設置する個人
- ②雨水タンクの貯留量に応じ補助（上限あり）
- ③環境課 ☎ 0968(25)7217
七城総合支所総務民生課 ☎ 0968(25)1000
旭志総合支所総務民生課 ☎ 0968(37)3111
泗水総合支所総務民生課 ☎ 0968(38)2714

●雨水浸透柵設置補助金

- ①住宅所有者
- ②雨水浸透柵を設置する人に対して1万円に浸透柵の設置数を乗じて得た額を補助。
- ③環境課 ☎ 0968(25)7217
七城総合支所総務民生課 ☎ 0968(25)1000
旭志総合支所総務民生課 ☎ 0968(37)3111
泗水総合支所総務民生課 ☎ 0968(38)2714

子育て・生活支援

●すくすく子宝祝い金

- ①市内に住所がある保護者
- ②祝い金として第3子から現金10万円を支給
それ以降は現金の加算と市内共通商品券を支給
上限は第6子で現金20万円と市内共通商品券10万円の計30万円を支給
- ③子育て支援課 ☎ 0968(25)7214

●第3子以降の3歳未満児の保育料全額無料

- ①第3子以降の3歳未満児
- ②熊本県多子世帯子育て支援事業の適用を受ける児童（基準あり）
- ③子育て支援課 ☎ 0968(25)7214

●子育てサポートセンター

- ①子どもを預けたい人と預かりたい人
- ②サポートセンター会員による子どもの預かり
- ③菊池市社会福祉協議会 ☎ 0968(25)5000

●地域子育て支援拠点事業

- ①主に乳幼児の保護者
- ②子育てに関する相談
- ③子育て支援課 ☎ 0968(25)7214

●病児・病後児保事業

- ①生後2カ月～小学3年生
- ②児童が当面病状の急変は認められないが、病気の回復には至っていない期間で、専用施設で一時的に保育
- ③子育て支援課 ☎ 0968(25)7214

●トレ活クラブ

- ①市内に住んでいる人
- ②菊池の観光資源である温泉・自然・歴史・伝統文化などを利用した市独自の健康づくり（負担金あり）
- ③健康推進課健康推進係 ☎ 0968(25)7218

●予防接種事業

- ①市内に住んでいる人
- ②定期予防接種などの実施
- ③健康推進課健康推進係 ☎ 0968(25)7219

●子ども医療費助成制度

- ①乳幼児・児童・生徒の保護者
- ②医療に要した負担金の一部を助成
- ③健康推進課国保・医療給付係 ☎ 0968(25)7218



就農支援

●就農支援

- ①就農希望者
- ②「第3セクター(有)ファームきくち」が地元集落、農業者、関係機関と連携し、技術指導などを実施
(有)ファームきくち ☎ 0968(26)5960
- ③農政課 ☎ 0968(25)7221

●農林業後継者対策推進事業

- ①市内に住んでいる新規就農者と配偶者を迎える農業者
- ②新規就農者と農業後継者の確保・育成を助成
- ③農政課 ☎ 0968(25)7221

就業支援

●空き店舗対策モデル事業

- ①空き店舗利用事業者
- ②商業地活性化と商業振興のため空き店舗対策を実施する商工会などに対し経費の一部を補助
- ③商工観光課 ☎ 0968(25)7223

●空き地及び空き店舗活用事業

- ①商工会、商店会、連合会、地域づくり目的NPO法人など
- ②商店街の空き家・空き店舗を有効利用するために整備する施設に対して補助
- ③商工観光課 ☎ 0968(25)7223